大 会 宣 言

私たちは本日、ＪＲ総連第 27 回定期大会を開催し、東日本大震災による被災からの復興を柱に、平和、人権、民主主義の確立をはじめとした当面の闘う方針を満場一致で確認した。

未曾有の巨大地震・大津波という自然の災禍に否応なく曝された３月 11 日、多くの尊い命と家屋などの財産、そしてかけがえのない想い出の品々が失われた。ＪＲ総連組合員も２名が犠牲となり、いまだに１名の行方がわからない。また、組合員の家族は 66 名が死亡若しくは行方不明。さらに避難生活を強いられている組合員も現在 114 家族。ＪＲ東日本労連やＪＲ貨物労連の組合員も含め、1,200 名以上が被災した。

その災禍の中でもＪＲ総連組合員は、助け合い、励ましあい、涙しながら、生きるために必死で労働者魂を燃やし、乗客と仲間と自らの命をも守った。被災者に思いを馳せる全国のＪＲ総連組合員は、物資の支援要請に素早く応えてくれた。ＪＲ貨物労組も物流に大活躍した。全国から集めた物資は、その温かい心とともに被災者へと届けた。５千万円を超える義援金も寄せられた。そして今、ＪＲ総連組合員は、本当に支援が必要な被災者に手が差し伸べられていないという社会の矛盾を感じつつ、ボランティア活動に汗を流している。それでも私たちは、悔しくとも歯を食いしばり、難局を乗り越え、地域と鉄道と、人々の心の復興を成し遂げる。

しかし福島原子力発電所事故は、地震・津波で被災した人々をさらに不幸に陥れた。「夢のエネルギー」を吹聴し人間の手で作り出した放射性物質は、人々を幸せにするどころか、「夢」を奪い去った。原発推進の愚策は、人類史にまで大きく汚点を残したといっても過言ではない。にもかかわらず原発の「安全性」を嘯き、推進に加担する御用学者やその同調者がいまだに存在する。私たちは、飽くなき利潤追求のために自然の摂理に背いて原発を推進するこの企てを明らかにし、エネルギー政策の転換を求め、「脱原発」を声高に掲げて闘う。

また、原発と核兵器とは切っても切り離せない。核を制するものは世界を制するがごとく、これまで核軍拡競争が繰り広げられ、現在も世界各地で核実験が競われている。さらに普天間基地返還に伴う米軍基地移転は暗礁に乗り上げたまま、他方、国会では改憲への道筋も整えられた。平和はまさに危機的な状況だ。私たちは平和を踏みにじる政策に警鐘を鳴らし、改憲や核開発に反対し、平和の闘いを推し進める。

同時に闘う労働組合への破壊攻撃を許さず、社会正義を貫き闘わなければならない。最高裁に上告中のＪＲ浦和電車区事件は、何としても法廷で無罪判決を勝ちとる。一方で、郵政不正事件や足利事件、布川事件の無罪判決から、検察や警察、裁判所の腐敗が明らかになった。私たちは冤罪を広く明らかにするとともに、取調べの全面可視化や証拠品の全面開示など、弾圧を許さない体制の構築をめざす。また、組織破壊者との闘いにも手綱を緩めることなく、弁護団とも連携し、広く連帯した闘いを創造する。

さらに来年度予算編成準備を前にして、国鉄改革の完遂も大きな課題だ。鉄道の安全を求める闘い、労働者派遣法の問題、グリーンスタッフをはじめ非正規雇用の正社員化は緊急の課題だ。国政で奮闘する田城 郁参議院議員をはじめ、ＪＲ総連推薦議員懇談会やＪＲ総連議員団に所属する心ある議員との協力関係を強めていかねばならない。そうした課題を据え、職場から闘うことを通じて、私たちは組織の強化・拡大を目指す。

立ちはだかる困難と苦難が大きければ大きいほど、労働組合の真価、労働者の生き様が問われる。私たちが培ってきた抵抗とヒューマニズム溢れる運動を発揮する、まさに今がその時だ。お互い肩を組み、笑いあえる日を夢見て、必ずや復興を遂げよう。戦争への道を断ち切ろう。そしてＪＲ浦和電車区事件に勝利しよう。私たちはこの歴史の転換点に、いかなる困難も乗り越え、前へ、そして未来へと突き進む。

以上、宣言する。

2011 年６月６日

全日本鉄道労働組合総連合会(ＪＲ総連)
第 27 回定期大会